

### 滑稽と俳句の伝統 3

伊藤浩睦

句座で滑稽な句を提出すると、これは川柳だと、いかにも見下したといった感じで、その場に相応しくないものを出したと非難する人が必ずいます。

圧倒的多数が、狎れあいと凭れあいのなかで、何十年と同じパターンの句を出しあって、それで良いとしているのだから、句座の予定調和を壊すような滑稽な句は要らないという考え方なのです。

今回は、滑稽な句を作ろうとする人についてまわる、川柳という批判について考えてみたいと思います。

滑稽な句を川柳と決めつける人は、詰まらないことしか言わない俳句を高尚なものだと思一方で川柳を下品なものだと決めつけており、俳句と川柳の基本的な違いについては驚くほどに無知なのです。

季語のないのが川柳だ、笑いを求めるのが川柳だといった程度の認識に留まっています。

句は江戸時代においては発句であり、付け合いをして、百韻、あるいは三十六韻を作って一卷とするときの最初の句ですから、二番目の句、これを脇句といいます。脇句を付けるように作ることが原則となっています。

その為、時候が分かるように発句には季語を入れ、付けてゆけるように言い切らず、余韻、余情を残して作るようにすべきだとされていました。

韻を残す方法として、切れ字を入れて、句の中の時間的経過を曖昧にして、断定を避けるということが行われました。

それに対して川柳は前句付けであり、七七の前句を事前に提示しておき、それを説明するかたちで作るのが基本であり、そのため、季語は必要とはされず、前句の内容を穿った見方で判断してみせたものが良いとされました。

俳句は発句、川柳は前句付けという、違いの基本を知っていれば、滑稽を狙った俳句を川柳と批判するような錯誤は起きません、知らないからこそ、そのような批判が出るのです。

笑いを狙った句であっても、あとに脇句を付けられるような作り方をしていれば間違いなく俳句であり、滑稽狙いだから川柳ではなくて、余韻、余情を成立させるものとしての、切れ字が入っていれば、また切れ字が入ってなくても、句がどこかで切れていて、言い切りの説明や断定的な要素が消えていけば、それは間違いなく俳句であるといえます。

右のことは成立の歴史的経緯から見た理屈ですが、実際のところは、滑稽な俳句と川柳との境目は曖昧となってきています。

それは川柳の作り手の方が前句を意識することがなくなって、川柳固有の、説明して断定する句が減ってきた上に、江戸文化的な穿ちの精神もなくなってきて、世相風刺を除けば、微温的な笑いに留まるものになってきた為に、滑稽な俳句といえるような川柳が増えてきたのです。

しかしこれは、川柳の俳句化であり滑稽な俳句が川柳と言われる理由にはなりません。

---